

◎ 「魅了する 煌めく薩摩焼」

公益財団法人 横山美術館 館長 鈴木 俊昭

薩摩焼と聞くと「金と極彩色で装飾された鹿児島県産のやきもの」というイメージを描かれる方が多いと思います。明治初期に、海外で大人気を博し輸出の花形となった薩摩焼は、実は全国各地でつくられて「SATSUMA」として海外に出ていったのです。産地別に本薩摩、京薩摩、大阪薩摩、神戸薩摩、東京薩摩、横浜薩摩、加賀薩摩、長崎薩摩そして名古屋薩摩と呼ばれますが、鹿児島で作られた本薩摩は、輸出された薩摩焼の 1 割にも満たないと云われています。なぜこれ程までに薩摩焼が全国各地でつくられたのでしょうか。

薩摩焼の歴史は古く、400 年以上前に文禄・慶長の役、別名「やきもの戦争」で朝鮮出兵した島津家の当主とされる義弘が、70 数名の朝鮮人陶工を連れ帰った事に始まります。その後、慶応 3 年(1867)のパリ万国博覧会で「薩摩錦手」が大きな注目を集め、薩摩焼の名前が海外に広く知られるようになりました。更に、日本政府が初めて出展した明治 6 年(1873)のウィーン万国博覧会では、折からのジャポニズムと云われる日本ブームに乗り、華やかな薩摩焼は大人気となり、世界中の人々が求める人気商品となったのです。

明治政府の推し進める海外貿易の重要な産物となったのですが、薩摩焼の本場である鹿児島だけではとても海外からの需要を捌く事が出来ず、全国各地の陶産地が参入して「SATSUMA」の大輸出時代が始まったのです。これらの輸出された薩摩焼は、国内では、薩摩伝承館(鹿児島県指宿市)、鹿児島県歴史資料センター黎明館(鹿児島市)、東京国立博物館、大阪歴史博物館、清水三年坂美術館などで見る事ができますが、海外では更に多くの薩摩焼が、各地の美術館に収蔵されております。薩摩焼は、英国の大英博物館、ヴィクトリア&アルバート美術館、フランスのパリ装飾美術館、セーブル国立陶磁美術館、米国ではボストン美術館、メトロポリタン美術館を始め著名な美術館の日本陶磁コレクションの一翼を担っています。

但し、近代陶磁の中でも薩摩焼の研究は、まだまだこれからという部分もあり、解明すべき多くの事柄が残されています。例えば、一般的に陶磁器は、素地および絵付け、裏印銘等により産地の特定が出来ますが、薩摩焼に限っては、薩摩で素地のみを使って他の地で絵付けを施したもの、裏印の無いものが多く存在し、産地特定の出来ないものが多くあります。



鹿児島でつくられた本薩摩の花瓶

1) 本薩摩

鹿児島でつくられた薩摩焼は、本(鹿児島)薩摩と呼ばれ、陶工が定着した土地によって、苗代川系、堅野系、龍門寺系などの産地に分けられます。

龍門寺窯では、京都や尾張など伝統的な窯業産地に陶工を派遣し、技術向上に努めました。細かな貫入(表面のひび)の入った釉薬に覆われた白色生地と厚く盛られた金泥による装飾が特徴です。鹿児島では、やきものに銘を入れる習慣が無かった為、他産地でつくられた無銘のものと混同し、産地の特定が困難になる一因となりました。薩摩焼は江戸時代薩摩藩の御用品として生産量と技術者が制限されていた為、明治時代以降でも他産地に比べて圧倒的に生産数量が少なく現存するものは、貴重なものとなっています。



本薩摩香炉



本薩摩花瓶

2) 京薩摩

日本各地でつくられた薩摩焼の産地の中でも、京都の栗田はその中心地として発展しました。明治初期、政府が陶磁器の輸出を振興すると錦光山宗兵衛や常山与兵衛らが盛んに輸出を始めました。最盛期の明治11年(1878)には栗田の生産額の90%を輸出向けが占めるようになりました。明治14年(1881)の京都、栗田の錦光山製陶所では、陶工250名、徒弟40名を有していたとの記録があります。京都では素地の生産から絵付けを行う伝統的な陶磁器産地ながら、海外で高い評価を得た薩摩焼を生産する為、鹿児島から素地を仕入れて絵付けのみを施す形態も加えて、一層の輸出量の増加に繋がりました。



京薩摩の香炉



京薩摩の花瓶

3) 東京薩摩・横浜薩摩

東京、横浜では、近くに良い陶磁器原料が無く、素地の生産が出来ませんでしたが、世界貿易の窓口となった横浜港と陶磁器の輸出を行う外国商館がある為、多くの薩摩焼がつくられました。明治 6 年(1873)のウィーン万国博覧会以降、政府の主導で上絵付けの指導が行われ、東京、横浜といった商地域に絵付けを中心とする窯業産地が誕生したのです。東京では、後に名古屋へ移り森村組の西洋絵付けの中心となった河原徳立が深川に設立した「瓢池園」、横浜では、著名な宮川香山を始めとして、保土田商店などが薩摩焼を作っていました。保土田の薩摩焼は、鹿児島県の沈寿官窯で素地を製造し、横浜の保土田商店へ運ばれ、そこで絵付けがなされ、森村組によってアメリカへ輸出され、ニューヨークのモリムラブラザーズで販売されたという記録が残っています。



東京薩摩



横浜薩摩

4) その他の薩摩焼

大阪薩摩と称される「藪明山」は、精緻な絵付けで明治初期から中期にかけて米国へ輸出され、明治 30 年代に最盛期を迎えました。

神戸薩摩の名工とされる「精巧山」は、京都で修行の後、神戸へ移って窯を開いたと云われています。神戸には、また加賀九谷からも画工が移住しました。

加賀薩摩は、明治 6 年(1873)のウィーン万国博覧会で好評を博した「赤絵九谷」から発展し、薩摩錦手風の意匠を施したものです。名工と云われる清水美山は、明治初期に東京で薩摩絵付けを学び、郷里の金沢に帰って窯を開きました。「美山」銘の作品には、産地特有の陶技を駆使した細密緻密な盛金絵付けが施されています。

名古屋でも薩摩焼が作られていました。名古屋で陶磁器の絵付けが始まった明治初期には、既に薩摩焼風の絵付けのものが作られており、これは、名古屋の絵付け職人が、九谷、京都などの陶産地からきて当時人気であった薩摩焼風の絵付けをしたものと思われます。薩摩焼きは、貫入の入った卵色の陶器で出来た素地が特徴ですが、名古屋薩摩は、瀬戸、美濃が磁器の産地である事から磁器に絵付けされたものが多くあります。但し、全面に絵付けがされておりますので、素地が全く見えず判別が出来ない状態です。



加賀薩摩



長崎薩摩



名古屋薩摩

5) 終わりに

海外で「SATSUMA」と呼ばれ人気を誇った日本のやきものは、明治政府の重要な輸出品として花開き、近代陶芸のパイオニアとされました。明治 10 年代が「SATSUMA」の隆盛期でしたが、明治 20 年代に入ると、全国で島津家の家紋が付けられた乱造品が出回り、激しい輸出競争に巻き込まれ、海外での評判も落として自縄自縛の状況となりました。残花の傾向を辿ったものの、咲き誇った明治の華は、世界の人々の人気を集め続けています。

名古屋市東区葵の横山美術館では、現在、「魅了する 煌めく薩摩」展を開催しています。名古屋では中々見る機会のない薩摩焼の名品 140 点余りが展示されており、圧巻の迫力です。この機会に是非ご覧下さい。

公益財団法人 横山美術館 (<http://www.yokoyama-art-museum.or.jp>)

名古屋市東区葵 1-1-21 TEL:052-931-0006

会期: 2019年6月1日(土)~10月31日(木)

開館時間: 午前10時~午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日: 月曜日(祝・休日の場合は翌平日)

入館料: 一般1000円、高・大学生・シニア65歳以上800円

